■ 新リレー連載：構文研究の理論と実践(1)

構文理論をめぐる潮流*

岩 田 彩 志

1. はじめに

今回から数回に渡って構文的アプローチについての連載を行うことになった。広義の構文的研究と現在海外で注目されている構文理論の双方を実証的に取り上げていく連載であるが、第1回目は具体例から離れて構文理論の動向について論じていく。

2002年9月6-8日の3日間、フィンランドのヘルシンキ大学において The Second International Conference on Construction Grammar (以下、ICCG2) が開催され、総勢約150名の参加者があり内容的にも非常に充実していた。残念ながらここでは詳しい報告をする余裕がないが、[1] ICCG2に参加してみて構文理論の現状および今後の動向について示唆的であると感じたことがあるので、そこから話を始めていきたい。

2. 現状および今後の動向

まず第一はその多様性である。ICCG2では、二重目的語や使役動詞などの項構造に関する現象だけでなく、語順や格、conditional や question, 談話に至るまで様々な現象について発表が成された。また構文の意義とか習得に関する発表もあった。分析法としても HPSG 方式の formalism を用いた発表から、特に理論化にはこだわらないコーパス研究まで、これまた様々であった。このように多様な発表が行われたが、「構文理論」とはこれでなければいけないというような雰囲気は全くなかったし、むしろその多様性を皆が楽しんでいるのではないかとさえ思えるくらいであった。

第二に、そのような多様性を認めたうえでも、今回の大会ではどちらかというと定式化を追求するよりも言語現象をありのままに記述・分析しようという発表が多かった。理論研究的観点のみならず語法研究的観点から眺めても得るところがあると思われる発表が幾つもあった。

勿論この2つの点は、構文理論のこれまでの発展と無縁ではない。大堀 (2001) で詳しく述べられているように、構文理論は1人の強力なカリスマが作り上げ引っ張ってきた理論ではない。おそらく今後も、構文理論は1つの形に収束するのでなく、色々な現象を色々な分析法で扱った研究が共存する形で進んでいくだろうと思われる。

またやはり大堀 (2001) で論じられているように、構文理論の持ち味は意味論的・語用論的側面を柔軟に取り込んでいける可能性にある。その持ち味が出たからこそ、ICCG2は大成功となったのであろう。筆者はかねてから、ヨーロッパには派手さはないが着実な研究が多いと聞いていたのだが、今回ICCG2に参加して成る程その通りであるとの思いを強くした。ヨーロッパのそのような学問的土壌に構文理論はうまくマッチするようである。

3. 非派生理論としての構文理論

ここで、構文理論がそのように発展してきた経緯について考察してみよう。構文理論の展開についてすでに大堀 (2001) が詳しく述べているので、ここでは異なる角度から構文理論の位置づけを探ってみたい。

構文理論を理解する上で重要と思われるのは、非派生理論 (non-derivational theory) の1つであるという点である。[2] アメリカ西海岸では80年代初頭から、Lexical Functional Grammar (LFG), Head-driven Phrase Structure Grammar (HPSG), 構文理論と代表的な3つの非派生理論が登場している(ただしこの順序は3つの理論が実質的に始まった時期をそのまま反映しているわけではない)。この他に categorial grammar や tree-adjoining grammar のような形式理論も、

* 草稿の段階で小原京子、大堀壽夫、藤井聖子、根本典子の諸氏から有益な助言を頂いた。ここに記して感謝したい。

1) ICCG2 の詳細については HP (http://www.constructiongrammar.org/) を参照されたい。

2) 「非派生理論」という名称が必ずしも現状を適切に言い表しているわけではない。ここで言及されている様々な理論が必ずしも派生の有無だけにこだわっているわけではないし、またミニマリスト以降のチョムスキー理論にとって「派生」の持つ意味が大きく変わってしまっているからである。しかし他にもっと適切な名称が見当たらないので、本稿ではこの名称を使用していく。

Role and Reference Grammar のような機能主義理論も非派生理論である。[3] また見落とされがちであるが、実は Langacker の認知文法や Lakoff の認知意味論も、このような非派生理論の一環として捉えるべきものである (Koenig 1999)。これらの理論はいずれもチョムスキー理論に対する代案として生まれてきており、根本的にはかなり重なる部分もある。しかしその創始者の性格や生まれた学問的風土など様々な要因から、それぞれに異なる形で発展してきた。

ある分析が (1) 旧来の分析と同じだけの現象を扱えること、(2) 旧来の分析で扱えないような現象を扱えること、の両方を証明出来た場合に、その分析は旧来の分析よりも優れた代替分析と見做される。分析の対象がある特定の言語現象に限定されていれば、この 2 つの点を証明することは比較的容易である。ところが言語理論同士を比べてその優劣を問うとなると、対象となる言語現象が非常に多岐に渡るし、また可能な分析手法も色々あるためにそう簡単にはいかない。

認知文法や認知意味論はチョムスキー理論では見過ごされてきたような現象(多義性、メタファー、心的移動等)を題材として取り上げ、これらの現象は形式統語論・形式意味論では扱えない、という論法を用いてきた。つまり (2) の点でその存在意義を主張してきた。この路線を取った場合に、その独自性は確かに強く主張出来るが、包括的な代替理論という性格はぼやけることにもなる。

それに対して LFG や HPSG (および categorial grammar, tree-adjoining grammar) では、チョムスキー理論で取り上げられてきたのと本質的には同じような統語現象をどのように分析出来るかを示すことに力を注いできた。つまり (1) の点で代替理論たることを証明しようとしてきている。この後者のグループの中でもさらに違いがあるのだが、私見ではチョムスキー理論の代替理論であることを一番分かりやすい形で示すことに成功しているのは HPSG であろう。生成文法の発展において最も多く分析対象になってきたのは英語であり、また多くの研究者にとっては依然として英語がどのように分析されるかが大きな関心事である(日本がまさにそうである)。そして HPSG では、派生を用いず、また目に見えない要素も極力使わずにどのようにして様々な統語現象を説明出来るかをまさに英語を題材として示して見せている。特に Pollard & Sag (1994) が詳しいので、この観点から非派生理論を知りたい方は、是非 HPSG を勉強されることをお勧めする。[4] また LFG では英語以外の現象を取り上げる傾向が強いが、Bresnan (2001) を読めばチョムスキー理論の代替理論としての性格がよく理解出来るであろう。

では構文理論はどうか? LFG や HPSG に比べると (1) の面でのアピールをあまりしておらず、総じてこれまで注意されなかった現象を取り上げる(つまり (2) の点を強調した)傾向が強い。その結果、3 つの理論の中では構文理論が、チョムスキー理論からの距離が一番大きく見える。しかし、だからといって構文理論に (1) の側面が全くないと考えるのは早計である。Paul Kay のようにその面の必要性を強く感じている研究者もいるし (Kay 1994, 2002)、また現在 Fillmore と Kay が中心となって準備を進めている course book でも構文理論の体系性を示そうとしている。Kay & Fillmore (1999) も、「中心的」言語現象を取り扱うのと同じ道具立てで「周辺的」現象も扱える、と主張しているのであって、従来取り上げられてきたような統語現象はちゃんと扱える理論であることが明確に述べられている(この点に関しては広瀬 1998 も参照)。

4. 何故「イディオム」ばかり扱っているように見えるのか?

ではそのように (1) の面での基盤を持っていながら、何故構文理論では (2) の面でのアピールが中心になっているのか? まず最大の理由は、多くの構文理論の研究者たちにとって、チョムスキー理論でよく扱われてきたような現象があまり関心を引くものでないこと、またそのような現象を基にしてチョムスキー理論との論争にエネルギーを費やすことにもあまり関心がないこと、である。このことにバークレーという土地柄が大きく関係しているのは言うまでもない。

もう 1 つの理由として、派生や目に見えない要

3) アメリカ国内にこだわらなければ、この他に Dik の Functional Grammar, Halliday の Systemic Grammar, Hudson の Word Grammar なども非派生理論として挙げることが出来る。

4) ただし、まずは Sag & Wasow (1999) や Borsley (1996) を読み、さらに Pollard & Sag (1987) と進んでからの方がより理解しやすいであろう。

素を用いなくても統語理論を構築することが可能だということは、特にアメリカ西海岸の研究者にとってはもはや常識になっていることが挙げられる。上で述べたように非派生理論が目立った活動を始めてからすでに20年が過ぎており、この間に様々な非派生理論の分析が提案されてきている。例えば raising や binding に対する代替分析 (Sag & Pollard 1991, Pollard & Sag 1992) が *Language* や *Linguistic Inquiry* といった主要な雑誌に発表された時から数えてもすでに10年が経過している。つまり、LFG や HPSG の基盤となる研究 (Bresnan 1982, Pollard & Sag 1987, 94) が世に現れた時とは事情が異なり、すでに(1)の点を証明するために労力を費やす必然性が薄れているのである。

このような背景からすれば、Adele Goldberg が構文理論は「単一層の統語理論 (monostratal syntax)」と一言で済まして、それ以上説明する必要性を感じないのはむしろ当然とも言える。移動現象をどう扱うかといった問題に煩わされることなく、自分の得意分野で長所をアピールしていけばそれで十分なのだから。他方このような時代の推移は、Kay & Fillmore のように形式理論として構文理論を整備しようとすれば、従来と同じ現象を扱っているだけではその独自性が出せなくなることを意味する。彼らの研究でイディオム的現象を取り上げる傾向が強い (Fillmore, Kay & O'Connor 1988) のは、このような事情に拠るところが大きい。

5. 日本との関わり

構文理論は「意味と形式の対応を適正に捉える」という基本理念を基に、「周辺的」と見える現象でも進んで取り上げることの出来る理論として注目されている。そのような性格がヨーロッパの学問的風土と合致した結果、ICCG2 の成功へと繋がったのは前述の通りである。しかしここで注目したいのは、やはり構文理論となじむ土壌を持っているのが実は日本だということである。大堀 (2001) で詳しく述べられているように、日本の言語学(特に英語学)には語法研究的関心に支えられ実践されてきた長い伝統があるし、また多くの日本人研究者の研究は、本人がどのような理論的枠組みを意図しているかに関わらずそもそも「構文的」である。構文理論をめぐる海外での流れが、日本人研究者にとってこのような学問的風土を見つめ直す良い機会を与えてくれると考えるのは筆者だけでないだろう。

この連載ではまさにこのような観点から構文理論を捉えていく予定である。冒頭に述べたように、次回以降は具体例を交えて広義の構文的研究と海外で注目されている構文理論と両方を実証的に取り上げていく。また本稿では触れる余裕がなかったが、Tomasello 流の言語習得観(藤井 2001 参照)やフレーム意味論についても適宜交えていく予定である。

参照文献

Borsley, R. (1996) *Modern Phrase Structure Grammar.* Oxford, UK: Blackwell Publishers.

Bresnan, J. (1982) *The Mental Representation of Grammatical Relations.* Cambridge, MA: MIT Press.

Bresnan, J. (2001) *Lexical-Functional Syntax.* Oxford, UK: Blackwell Publishers.

Fillmore, C., P. Kay and M. C. O'Connor (1988) "Regularity and Idiomaticity in Grammatical Constructions: The Case of *Let Alone*," *Language* 64, 501–38.

藤井聖子 (2001) 「構文理論と言語習得」『英語青年』第147巻第9号、536–40.

広瀬幸生 (1998) 「構文間の継承関係——because 節主語構文の構文文法的分析」『英語青年』第144巻第9号、511–14.

Kay, P. (1994) "Anaphoric Binding in Construction Grammar," *BLS* 20, 283–99.

Kay, P. (2002) "English Subjectless Tagged Sentences," *Language* 78, 453–81.

Kay, P. & C. Fillmore (1999) "Grammatical Constructions and Linguistic Generalizations: The What's X Doing Y Construction," *Language* 75, 1–33.

Koenig, J.-P. (1999) *Lexical Relations.* Stanford: CSLI Publications.

大堀壽夫 (2001) 「構文理論——その背景と広がり」『英語青年』第147巻第9号、526–30.

Pollard, C. & I. Sag (1987) *Information-based Syntax and Semantics*, Vol. 1: *Fundamentals.* Stanford: CSLI Publications.

Pollard, C. & I. Sag (1992) "Anaphors in English and the Scope of Binding Theory," *Linguistic Inquiry* 23, 261–303.

Pollard, C. & I. Sag (1994) *Head-Driven Phrase Structure Grammar.* Chicago: University of Chicago Press.

Sag, I. & C. Pollard (1991) "An Integrated Theory of Complement Control," *Language* 67, 63–113.

Sag, I. & T. Wasow (1999) *Syntactic Theory: A Formal Introduction.* Stanford: CSLI Publications.

(大阪市立大学助教授)